

タイトル:平成 23(2011)年度 研究セミナー

日程:平成 23 年 12 月 19 日(月)～21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「中国と中東の関係にたいする既存研究とその批判的検討」

イタマル・リー (韓国現代中国研究所・客員研究員)

私の研究テーマは、中国・中東関係に関する研究、すなわち、極東と中東を結ぶ作業で、私はこれを中洋国際政治の研究と定義している。中東に関心を持ち研究してから 15 年が経つ。韓国の中東研究は歴史が浅く、多様な研究テーマがないので、私の中東研究は、主に米国と日本の研究者から多くのことを学んだ。特に、私の最初の中東研究は、日本の学者の研究成果から大きな影響を受けたといっても過言ではない。

2010 年の夏、大阪大学で開設されたパレスチナ・アラビア語の研修課程を履修したことがある。授業中にパレスチナ・アラビア語を日本語で表現し、日本語の文章をパレスチナ・アラビア語で表現するプログラムであったが、無事に通過し、所定の課程を修了した。これは一つの「学問的格闘」とも言えるだろう。米国のワシントンで開催された中東関連の会議で米国のある教授は「いい研究者になるためには、うまく戦う必要があります。学問的にも戦わなければならないということです」と言った。私は、日本語で日本の中東研究を学び、体得する過程の中でその真意を再確認することができた。そういう中で、私は中国と日本の中東研究の様々な側面を併せて見るようになった。

今回の東京外国語大学 AA 研の中東☆イスラーム研究セミナーは、まだ体系的に定立されていない中国と中東の関係に関する研究の理論的検討を十分に議論できる非常に良い機会であった。また、本を通して覗いていた日本の学問研究の風土と人材養成システムの一側面を直接見ることができた非常に有意義な場で、韓国と中国で学習した経験のある私はとても貴重な比較の視点を持つこともできた。今回の研究セミナーに参加して感じたことを少し整理したい。

研究セミナーは、3 日間集中的に行われた。参加者は自分が準備してきた研究論文を 1 時間発表し、その後 1 時間は参加者全員と教員全員が自由に議論する形となった。参加者は東京大学、慶應義塾大学、大阪大学、そして日本学術振興会特別研究員などの計 7 人で構成されたが、彼らは日本の次世代中東研究者と言える人材である。研究分野も多様で人類学、歴史学、社会学及び国際政治学など、学際的な研究が行われる場となった。特に、ティーチャーの役割を担った東京外国語大学 AA 研中東・イスラーム研究分野の先生方も非常に開放的で、参加者たちが立派な研究者になるための必要な部分を機知に富んでいる言葉とともに色々と指導してくれた。また、セミナーで真剣なやりとりが行われる中でも笑いが絶えなかった姿はとても印象的であった。「楽しい研究こそ研究の基本」というのが、私の信念でもあるため、私にとっては本当に面白い学習経験であった。

中国・中東関係における既存研究に対する批判的検討を日本語で発表した後、多くの参加者から建設的な意見をもらい、色々教わった。互いに議論し合いながら、日中韓の中東研究が学校や研究機関でどう進んでおり、どんな特性を持っているかについての意見も交換した。とても意味深かったのである。

日本語でコミュニケーションを取ることは何の問題もなかったため、日本の学問作りの過程を直接体験することができた良い機会だった。2010年大阪大学に続き、今回は東京でこのようなプロセスを介して、日本で中東専門家として育成されるのは喜ばしいことだと思う。特に、最後のセッションで提示された「私の博士論文」というテーマでの発表は素晴らしいカリキュラムで、先輩研究者の学習戦略と研究の流れを知ることができて非常に有意義であった。

何よりもセミナーの関係者の方、先生方、特に私の発表で司会を担ってくださった黒木英充先生、そしてFSC事務局の千葉様には大変お世話になりました。心から感謝の意をお伝え申し上げます。誠にありがとうございました。